

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

3

Vol.47 No.3 MARCH

2024

小児看護技術の学び 前編

子どもの権利擁護の実践に向けて



連載

学んで驚く! 子どもの応急手当
やけどは水で冷やすが第一

へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第33回 幸せであれ

「どうしていちごがのっているの？ どうして黄色い（生地）とか、どうやってちゅくるの？」「こうやったらおいしいですよって書いてあるけど、好きに作っていいんだよ」と、ホットケーキの箱のサンプル写真をめぐる、うちの5歳児と私の会話である。

「ぼくはこうやって切って、かしゃねたい。そのうえに、またかしゃねたい」と自分ならどうしたいのかを、手に手をおいて表現してくる。確か、『しろくまちゃんのほっとけーき』という絵本も、お皿に8枚ぐらいのホットケーキを積み上げていただろうか。

私はアメリカに一人で留学していた18歳のとき、週末になると、車を運転してIHOPというレストランに食べに行くことがあった。ホットケーキやワッフルなどのアメリカンメニューのお店だ。『しろくまちゃんのほっとけーき』並みに重ねてある。

留学という華やかな体験を思い描く人もいるかもしれないが、私が日本を飛び出して思い知ったのは、世界の冷たさであった。知り合いも伝手もなく行ったので、極論、私が死んでもすぐに発見されることもないという感じであった。世界から無視されている感覚だ。これを体感してしまったからこそ、世の中に役に立つ人間になりたいと強く思った。

そんなことをふと思い出し、近所で評判のホットケーキを食べに行った。リコッタチーズを惜しみなく使ったそれは、口に入れるとすぐにしゅわしゅわと溶けていった。予想を超える軽さに驚いた。

ちょうどそのとき、二人の小児がん経験者からメー

ルが届いた。一人は、転職が決まった。もう一人は、特別支援学校高等部に合格したという報告であった。仕事が順調に進まなかった人には、成育歴から興味や関心を、認知機能の検査結果から適性を洗い出し、向いている仕事を一緒に探した。

別の中学生は、通常学級で頑張っていたが、授業の半分も理解できず、テストも5点で苦しんでいた。そこで認知機能の検査の結果から、高校は特別支援学校を視野に入れてもいいかもしれない、と私が提案した。子どもは受験勉強を頑張り、親子が選んだ新しい道は拓けていった。

皆、病気の治療をしたのは10年以上も前である。それでもここまでたどり着くのは、一般の人よりもハードルが高い。どこかの患者会で、自分たちが治療後もいかに大変かという話を聞いた。それは痛いくらいにわかる。しかし、一般の人と比較して、明日からハードルが低くなるのかといえば、残念ながら、そんなことは起きない。時代の変化に10年は要するからだ。

私は、親子の越えるべきハードルが高いのならば、越えられるまで手を尽くしたい。そのときに一番大事なのは、親子自身にもその意思があるかどうかなのである。親子に意思があるならば、私は子どもに検査を実施し、社会の中にどこか道はないかと探し回る。

澄んだ青空に浮かぶ雲のような、ふわふわのホットケーキ。お祝いに、届けたいと思った。

これからの人生も幸せであれ。

佐藤聡美

さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞（日本小児血液・がん学会賞）受賞。